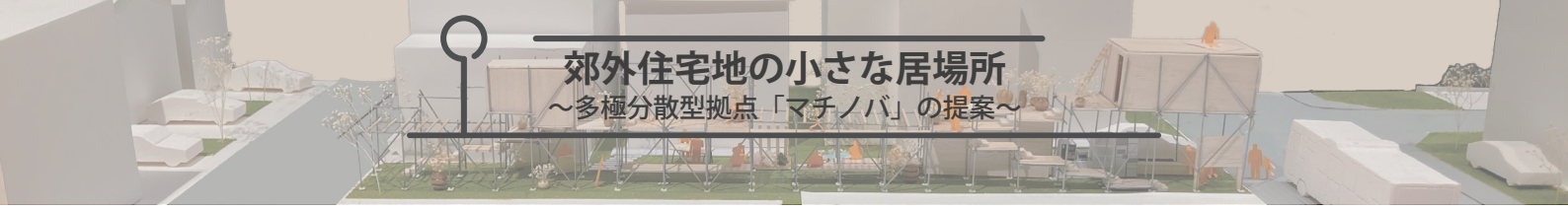
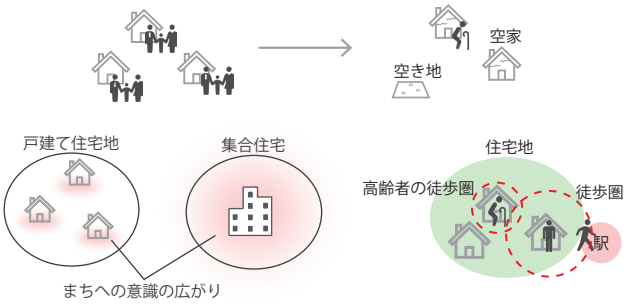


郊外住宅地の小さな居場所
～多極分散型拠点「マチノバ」の提案～

郊外住宅地を分析し、提案方針をたてる

大都市近郊の郊外住宅地は高度経済成長期時代に、ベッドタウンとして開発された。鉄道駅を中心として、計画的に開発されたことで、高水準の都市インフラと豊かな緑によって、良好な住環境を有している。しかし、同時期に人々が流入したことで高齢化が急速に進み、住民のライフスタイルの多様化、空家空き地の増加、インフラの老朽化など、まちの魅力・活力の低下につながる様々な課題を抱えている。



郊外は都心に比べて
徒歩圏内に選択肢が少ない
（居場所・消費活動の場・余暇の過ごし方の選択肢）

▶▶▶

コミュニティの希薄化
地域の魅力低下
高齢者の引きこもり

持続的で魅力的な郊外住宅地であるために、まちの価値向上を目指すために、
徒歩圏にあるバス停に居場所・交流の「場」＝「マチノバ」をつくる
～バスを「待ち」、自分の「まち」で過ごす「場」所～

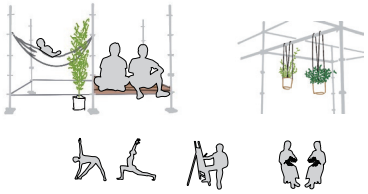
徒歩圏にあり、生活の文脈に位置付けられやすいバス停

交通拠点としてのバス停　　徒歩圏内に暮らしの「場」が出来る

自分と隣人で育てる小さな居場所「マチノバ」

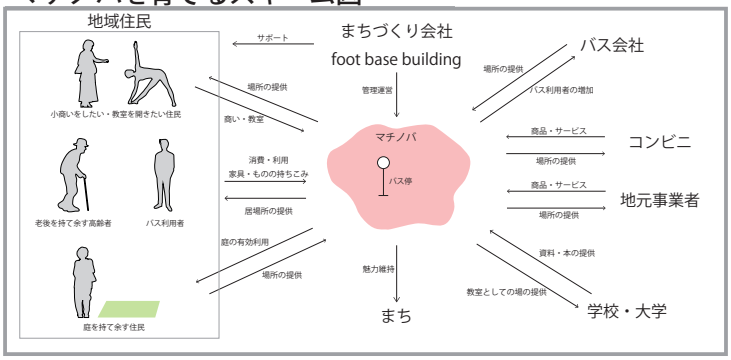
足場ユニットを利用した「仮設的な」場づくり

足場ユニットの活用理由

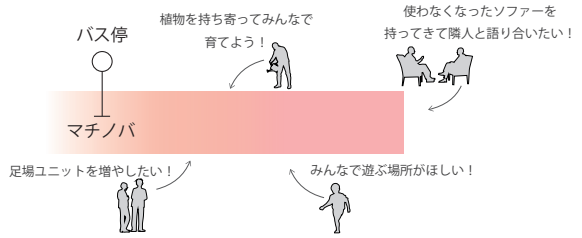


足場ユニットを利用したマチノバは、場所を選ばず、まち全体に展開できる。マチノバから自分の家・お気に入りの場所まで、ものを持ち込んだり、じぶんたちで好きなように居場所をつくり、つなげていく。

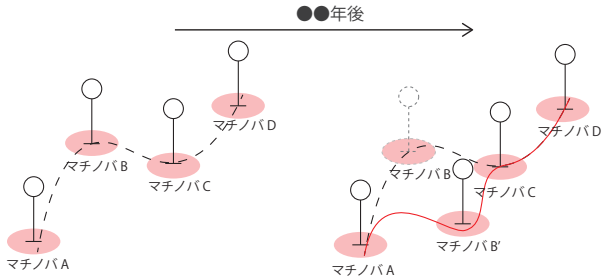
マチノバを育てるスキーム図



はじめは小さく、住民によって展開し、育っていく



はじめはバス停周りに小さくマチノバが展開し、
住民の要望やセルフビルドでマチノバが育っていく



設置・撤去が可能であり、バス路線の変更や人口増減に伴い足場を展開
バス停の撤去移動があっても地域の「場」として
マチノバが確立していればそのまま残すことが可能

青葉台駅北エリア配置計画　青葉台駅北エリアのバス停 59 か所に対して、マチノバを展開する

マチノバを郊外住宅地に展開するケーススタディエリアとして、青葉台駅北エリアのバス停 59 か所に対して、配置計画を考える。それぞれの、バス停周辺の土地利用と関係を考えながら、マチノバの様々な利用と、郊外の新しい暮らしを提案する。

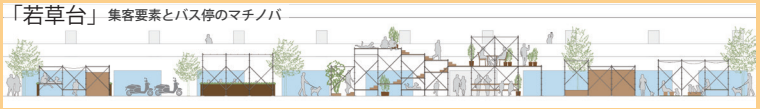
集客要素とバス停のマチノバ　＋

ストック要素とバス停のマチノバ　＋

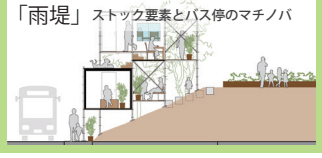
交通要素のバス停のマチノバ

また、その内の 3 つのマチノバに対して、詳細を考える。

「若草台」集客要素とバス停のマチノバ



「雨堤」ストック要素とバス停のマチノバ



「桜台上」交通要素のバス停のマチノバ